

ルカによる福音書 7章11～17節

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

（説教）

「もう泣かなくともよい」。そう、イエスさまは言われるんです。

他の聖書ですと、この言葉は、例えば口語訳聖書ですと「泣かないでいなさい」ですとか、文語訳聖書ですと「泣くな」。そうやって訳されている言葉なんですよ。そう聞くと、皆さんにはどう聞こえますでしょうか。「泣かないでいなさい」、「泣くな」。まるで、聞きようによっては、こう、イエスさまがやもめの目からあふれる涙をスパッと止めようとしているような、また、泣いているやもめに対して、こう、ぴしゃりと言い切っているような、そんな言い方にも聞こえるのではないのでしょうか。

もちろん、そうではないんですよ。この「もう泣かなくともよい」という言葉の前に、「憐れに思い、」と聖書には記されています。この「憐れに思う」という言葉はギリシャ語聖書ではスプラクニゾマイという言葉で記されています。この言葉の意味は、もちろん憐れに思うという意味で訳すことも出来るんですが、もっと詳しく言いますと、内臓、はらわたがちぎれるようなそのような痛みを伴う心持ち。そういった気持ちをスプラクニゾマイと言うんです。

つまり、イエスさまは本当に心から苦しまれて、はらわたが引き裂かれるような、胸が張り裂けるような、そんな気持ちでやもめに声をかけたというんです。痛みを伴われ、憐れみを伴われ、そしてやもめに心を寄せて言われた言葉にイエスさまが込められた意味、気持ち。それは、言葉通り、「もう、泣かなくとも、よい」なんです。

この「もう泣かなくともよい」というイエスさまの言葉。私は本当に好きな言葉なんです。本当に「あたたかい」じゃないですか。もう泣くな、今、あなたの両の目から流れているその涙を、ぬぐいなさい。もう大丈夫だから。

この言葉をかけられたやもめは、先ほどお聞きになったように、一人息子を亡くしたんです。夫に先立たれたやもめにとって、この亡くなった息子は生活面でも頼りとしていたでしょうし、何よりも精神的な面において、たった一人の家族として頼りにしていたと思うんです。そんな息子が亡くなった。ああ。なぜ。わたしは独り、取り残されてしまった。そんな息子を亡くしたやもめの孤独、悲しみはわたしたちには計り知ることには出来ないでしょう。「もう泣かなくともよい」という言葉から解る通り、やもめは泣いていました。ただ泣いていたのではないでしょう。おそらく慟哭、という言葉が適切であっただろうと思います。言葉にならない叫び声をあげながら、やもめは一人息子の亡骸が入っている棺に縋り付いていた。

「もう泣かなくともよい」。この言葉は、そんな絶望的な光景を目の前にして、目のやり場に困って、心の置き所に困って、どうしたらいいかわからない、それでも何かをしなくちゃと、絞り出すようにしてようやく声をかける。そのようなナインの町の人々や、今ここにいる私たち人間の放つ、苦し紛れの慰めの言葉とは、違うのです。「もう泣かなくともよい」。この言葉は、本当に心から、憐れみを持って、やもめや、またここにいるわたしたちを涙のない場所へと導いてくださっている。イエスさまの招きの言葉なのです。

皆さんはもし心がすり減ってしまっただろうと、また悲しみや孤独を何しても拭うことが出来なかったときに、自らの罪深さに絶望をおぼえるときに、そういったことから涙が溢れて止まらないときに、ふと「もう泣かなくてもいいよ」と、この人にならずに自分の身を委ねてもよいと思って心を許していた人から、そう、言われたなら、どうなるのでしょうか。その言葉通りに涙はスッと止まるのでしょうか。おそらく、と言いつつ確信を持って言うんですけど、誰もそうはならないだろうと私は思うんですね。

個人的な話で申し訳ないのですが、最近、精神的にしんどいことが立て続けに起きまして。もう、辛い。しんどい。何にもしたくない。誰か何とかしてくれ。という状況に陥ってしまいました。でも説教は書かなきゃいけないわけなんですよ。めげている場合じゃないだろうと。そんな感じで自分に鞭を入れてですね、机に向かって、この説教を書くために、まずはと、改めてですね、今日の聖書箇所を読んだわけなんです。そうして読み進めていって、「もう泣かなくともよい」という箇所に思いを巡らせていたときでした。涙が出てきたんです。こんなこと言うのも恥ずかしい話なんですけど、本当に涙が止まらなくなりました。なんて言うんでしょう。籠が外れた、堰を切って溢れだした。そんな感じです。「もう泣かなくともよい」。イエスさまはそう言われた。しかし、そう思って押さえつけようとすればするほど、なぜだか次から次へと涙が溢れてくるんです。そうしてひとしきり泣いて、ようやく涙は止まりました。

今日の聖書箇所からいただいた恵みのうち、まず一つ、大事なことがあると私は思うんです。それは、「わたしたちは、泣いていいんだ」ということです。

もう泣かなくともよくなるために、わたしたちは涙を流さなければ。たとえ、どなたであろうとも、涙を流していなければ、流れる涙を止めることはできない、ということなんだと思うんです。わたしたちは、皆、心のどこかで泣いてはいけないと思っている。泣くことは、感情を表に出すことはよくないと思って自分の心に蓋をして我慢して生きている。おそらく世の文脈であるならば、それは正しいでしょう。この世で生きていくにあたって自分の感情をコントロールすることができない、涙を抑えることができない人々は、生きづらさを感じずにはいられないはずですし、周囲の人々もポジティブな感情を抱きにくいと思います。

しかし、神さまの前にあって、イエスさまの前にあって、本当にどうしようもない悲しみや苦しみが襲い掛かってきたとき。そのとき、わたしたちは、泣いていいのです。

泣いていいのだ。今私はそう言いました。エモーショナルにここまで御言葉の取次ぎをしてみました。本当なら最後までこのまま走り抜きたい、大事なことの二つ目に向かいたいと思うのですが、しかし、ここで一度立ち止まってみたいと思います。つまり、わたしたちは本当に泣いていいのか、という問いを聖書に聴きたいと思うのです。

今日の聖書箇所、ナインのやもめの話とよく似た共通点を持つ聖書箇所があります。それは、同じくルカによる福音書八章の四十節から記されている「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」

の中にある、ヤイロの娘の生き返りの場面です。ざっくりとあらすじを説明しますと、この場面は会堂長であるヤイロの一人娘が危篤状態に陥り、イエスさまに娘を救ってくださいとヤイロがお願いをするところから始まります。そして娘のところへ向かう途中、イエスさまの服に触れて癒される女性の話があり、その御業を行われている間に娘は亡くなってしまいます。もうイエスさまの手を煩わすことはないと言って、ヤイロや周囲の人々がイエスさまにお帰り願おうとするのですが、イエスさまは「恐れることはない。ただ信じなさい」と言って、娘のところへ向かいます。亡くなった娘が眠っているところに着くと、そこにはもうすでに人々が集まり、泣き、悲しんでいました。その人々にイエスさまは「泣くな」と言います。娘は死んでいない、眠っているだけだ、と言うのです。人々はイエスさまを嘲笑いました。しかし、イエスさまが娘の手を取り、「起きなさい」と言うと、娘の体に霊が戻り、起き上がった。大筋としてはこういった内容になります。

今日の聖書箇所と、今お話ししたヤイロの娘が生き返る箇所。いくつか共通点があったことが、お分かりいただけるかと思えます。まず、亡くなった人がイエスさまによって生き返るといってお話です。また、その時にイエスさまが「起きなさい」という言葉を言うのも同じですね。そして、涙を流す人々に対してイエスさまがそれぞれ「もう泣かなくともよい」、「泣くな」という、涙を流さないようにと言う意味合いの言葉を発するというのも共通点として挙げることが出来ます。これらのことから、この二つの箇所はよく似ていると言える。しかし、ナインのやもめの話と、ヤイロの娘の話において、今、共通点として挙げた中に、決定的に違う意味合いを持つ部分があるのです。それはどこか。

皆さんは、泣き屋、もしくは泣き女、泣き男という言葉をご存じでしょうか。泣き女、泣き男という言葉は聖書の中に出てくる言葉です。また、今日の聖書箇所のすぐあとにあります、ルカによる福音書七章三十一節も泣き屋を指しているだろうとされる箇所として挙げることが出来ます。さて、この泣き屋と呼ばれる人々が一体何者かを簡単に説明しますと、泣き屋とは、亡くなった人を悼むために、大声で泣くことを生業とする人たちです。ある人が亡くなった時、この亡くなった人は、こんなに人々を悲しまれるほどに、惜しまれるほどに価値があった人だったのだ、ということを示すために、涙を誘うために、葬儀などにおいて泣き屋が大声で泣くのです。この泣き屋という職業、文化は世界各地において見ることが出来、当時のイスラエルにおいても人が亡くなった際には泣き屋と笛吹きを雇うことが習慣として実際にあったのです。

どうしていきなりこんな話を始めたのかというと、ヤイロの娘のところに集まって泣いていた人たちは、いわゆるその泣き屋だったのです。つまり、本当の涙ではなかった。マタイによる福音書、マルコによる福音書にあるそれぞれの並行箇所にはヤイロの娘が眠る家の周りで「泣き喚いて騒ぐ」「笛を吹き、騒ぐ」という描写がされています。

したがって、イエスさまが泣いているやもめに言った「もう泣かなくともよい」と、ヤイロの娘のところに集まった泣き屋たちに対して言った「泣くな」は全く意味合いが違うのです。

先ほど、「わたしたちは、泣いていいのだ」そういった恵みを神さまから与えられている、と言いました。しかし同時に、わたしたちは神さまからいただいたその恵みに対して、安易に飛びついて貪ってはならないとも思うのです。つまり、わたしたちは通りの真ん中で泣くことは避けなければならない、わたしの涙にはこんなにも価値があるのだと誇張することは避けなければならないということを心したいと思うのです。神さまに対して泣き屋のように涙の価値を叫んだり、大声でわたしたちの所在を示さなくとも、悲しみの中で抑えきれずにこぼれてしまった涙に神さまは気付いていると思うんですよね。わたしたちの在りように、当然のように気づいている。わたしたちの中にあるよいところもまた罪であるところも、神さまはすべてをご存じであるということをお忘れずに、わたしたちは誠実でありたいと思うのです。

そして、今日いただいた恵みのうち、もうひとつ大事なことがあると言いたいです。一つ目に、わたしたちは、泣いていいのだ、と言いました。そして、それからの二つ目。それは、その流したわたしたちの涙を、神さまは、イエスさまは拭ってくださるんだ、ということです。

ヨハネの黙示録の二十一章三節から四節には次のような御言葉が記されています。お読みしますので、そのままお聞きください。

「そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」

この箇所には神の国の完成、死が死でなくなり、私たちの悲しみや嘆き、そしてそれによって流れる涙を神さまはことごとく、すべて拭い取ってくださるということが示されています。

今日の聖書箇所において、イエスさまは「もう泣かなくともよい」と言われ、やもめの涙を優しく拭い、一人息子を彼女のもとにお返しになりました。そこには間違いなく、死に勝利し、神のご支配である神の国の前触れが記されています。確実に、神の国は近づいているということがこのようにして示されているのです。

そして、今この瞬間も神の国が近づくという福音の歩みは止まることなく続いているのです。それはイエスさまが、わたしたちの罪をすべて背負われて十字架に掛られたこと、そして、その三日の後に復活したこと。これらのごことによって、わたしたちが罪の赦しと、神さまのご支配が確かにされ、また死の支配からも解放されているのだという確信を得させていただいたこと。また、イエスさまを復活させて下さった神さまが、信じる者をもすべての完成の日に復活させて下さるということをご確かな約束として与えてくださっているということ。そしてそれらを信じるわたしたちがこうして教会に集い、神さまへの礼拝を捧げているということ。そして祝福と共に世に遣わされて、福音を述べ伝えていくこと。これらのごことすべてはつながっている。そして神の国の訪れを物語っているのです。今ここにわたしたちは神の国の到来の中にいるのです。

その到来の中にいるわたしたち一人ひとりを、神さまは、イエスさまはご存じです。そして、わたしたち一人ひとりが誰にもばれないように抱えているものを、もしかしたら時運でも知らず知らずのうちに心の引き出しに入れて鍵をかけてある、その思いを知っている。その心は、神さまに打ち明けていい。祈り、委ねていいのです。その時、神さまは、イエスさまは必ずこの言葉を言って下さいます。「もう泣かなくともよい」と。そしてわたしたちの涙を拭いて下さるのです。

最後に、イエスさまは今日の聖書箇所の舞台となったナインの町に向かう前に、カファルナウムの町にいました。七章一節以下にあるように百人隊長の僕を癒されていたのです。しかし、「それから間もなく」という言葉にあるように、癒されるとすぐにイエスさまはナインへと向かうのです。カファルナウムからナインは距離にしておよそ四十キロ。勾配のある山道を大勢の群衆を引き連れて進むのです。四十キロの山道を進むのであれば途中で休んだり、別の町に寄って癒しの御業をなさったり教えを説かれてもいいはずですが、しかし、イエスさまはまっすぐにナインへ向かった。なぜイエスさまは癒された後すぐに休むことなく、また、途中どこにも寄ることなく、まっすぐにナインへ向かわれたのでしょうか。

それは間違いなく、やもめの一人息子の葬列が町を出る瞬間に「ちょうど」出会うためです。イエスさまには聞こえていたのです。四十キロ離れたカファルナウムにいたときから。やもめの悲痛な慟哭が。涙ながらに叫ぶ声が。だから、すぐにナインに向かわれたのです。やもめの涙を拭うために。

わたしたちにもそうです。わたしたちの涙を拭うために、イエスさまは来られます。礼拝を通して、御言葉を通して。イエスさまは必ず来られる。どうしようもない困難に、果てのない苦悩に打ちひしがれる、そのようなわたしたちの涙を拭うために。イエスさまは来られる。「もう泣かなくともよい」という言葉とともに。イエスさまは来られる。そしてわたしたちの涙をイエスさまが拭われるとき、そこに神の国があるのです。救いは、ここにあるのです。

祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま。今日も御言葉をありがとうございます。いつもわたしたちを礼拝に招いてくださり、そして出会って下さることを、そして救いの確信を与えてくださる恵みを心から感謝いたします。

どうか今困難の中にあり、もう涙も枯れてしまった、そんな人にあなたが寄り添って下さって、その方が涙を流すことが出来るようにしてください。そしてその後どうか涙を拭ってくださいますように。

また、ここにいるもの、インターネットを通じて礼拝に参加しているもの一人ひとりの今週の歩みがあなたのまもりのうちに確かに歩いていくことが出来ますように導いてください。感謝して、この祈りを主イエス・キリストの御名を通し、御前におささげいたします。アーメン。